

このたび、財団法人大日本蚕糸会総裁、常陸宮殿下より貞明皇后記念蚕糸科学賞を拝受の栄に浴した事は当社の社歴に残る記念すべき事である。この賞は従来、研究機関が受賞されていたが製糸メーカーが選ばれたのは今回初であり、光栄の極みである。当社の歴史と背景を述べると、戊辰戦争が終わった明治4年に廃藩置県となり庄内藩の武士は解体されその救済事業の一環として明治5年4月より鶴岡市の東10kmくらいのところにある原野を明治政府の支援を受け3,000人の庄内藩士が1年で300haの開墾を行い、この開墾地の地名の「松ヶ岡」が社名の「松岡」になっている。現在、この松ヶ岡に当時のまま現存している養蚕の蚕室、本陣等の建造物は、国史跡指定を受け一部を開墾記念館として一般に公開されている。

当時、日本の輸出品の中で生糸が最大の外貨を得る商品であったため、桑苗55万本を植え付け養蚕を始め蚕種製造の大事業をおこした。開墾から15年後の明治20年に鶴岡市に松岡製糸所を作り生糸の製造を始めたのが当社の創業である。明治20年の創業から約60年間は松ヶ岡開墾事業の一部門であったが、昭和17年に株式会社松岡製糸所として独立することになった。この間、明治天皇ご巡行の折りご名代として北白川宮親王、貞明皇后、昭和天皇の行幸、大久保利通の視察等もあった全国に例のない武士団の農への一大転換であったと思う。松ヶ岡開墾場の綱領の5ヶ条の第1条に「松ヶ岡開墾場は徳義を本とし産業を起して国家に報じ以て天下に模範たらんとす」との大理想を掲げ、これを百有余年受継ぎ、地域、社員のためそして生糸を作り続けてきた歴史が松岡ブランドの生糸であったと思う。

創業以来幾多の困難を乗り越え成長を続けてきた



貞明皇后記念蚕糸科学賞の表彰式

蚕糸業も、昭和40年代の最盛期には23万kgの生産があったが、貿易の自由化が進み繭、生糸、絹織物にも海外の安価な輸入品が入るようになり現在は2.5万kgに減少している。製糸部門は将来的に拡大発展の可能性が薄いと判断し、縮小して新規部門参入の検討に入った。昭和47年には村山市にある村山工場の製糸設備を松山町の本社工場に移設し、集中生産と大幅な合理化を進めた。また、昭和58年に天童市、酒田市に大手電子関連企業の進出の折に、協力工場として生糸製造技術しかない当社が県当局と地元金融機関の斡旋と関係者皆様のご支援により最先端の

バリューサイト  
VALUE SIGHT

## シルクを通して、 歴史と伝統を 守り続ける

蚕糸絹業界は海外の輸入品に押され減退を余儀なくされているが、生き残りをかけ、付加価値が高く、時代に見合った新素材、新製品を次々と開拓することで、シルクの可能性に挑戦している企業に注目する。

電子関連企業の協力工場として参入することが出来たのである。平成2年に機械設計、加工部門を導入し現在では生糸部門が10%、異業種部門が90%となっている。輸入の自由化の中で当社は海外では作ることが出来ない新形質生糸の製造に挑戦し、ボリューム感があり、しわになりにくいファインシルク、合織と生糸を複合したハイブリットシルク、蚕種から生糸、織物まで統一ブランドで高品質繭から作った松岡姫などを開発している。平成10年に日本古来の蚕品種小石丸の開発に着手した。小石丸は歴代の皇后が皇居で飼育され繰られた生糸で、宮中婚礼の儀の装束や正倉院復元衣裳などに供されており、また愛子様ご誕生の折の「おくるみ」にも使用されたと聞いている。小石丸の蚕種は一般には使用され

ていなかったが規制緩和により飼育が可能となった年に県当局、養蚕農家、織物会社のご協力により百数十年ぶりに超高級生糸として現代によみがえらせることに成功した。

このたび受賞となったスーパーフラットシルクは、財団法人大日本蚕糸会が扁平光沢生糸として特許を取得した生糸を当社ブランドとしたものである。従来の生糸は繭7～8粒で一本の糸を作るのを、スーパーフラットシルクは10倍の70～80粒の繭から出る糸を一本にし、これを扁平<sup>へんぺい</sup>にした生糸である。特長としては、丸みのある糸を扁平<sup>へんぺい</sup>にすることにより織

## 庄内



松岡株式会社  
取締役会長

下妻 卓雄

物になると見る角度により乱反射するため光沢が良く、一本の糸の数が多いために染色の深みが出ること、軽さがあるなどの良さがある。大日本蚕糸会のテスト段階のものを量産化するための設備改造と製糸方法の研究を重ね、ようやく製品化することが出来た。絹織物の姉妹会社、松岡機業に試織を依頼しスーパーフラットシルクの特長を出すのに試行錯誤しながらストール生地、洋装生地等、次々に新商品の開発が進み、今後の販路拡大を期待しているところである。ネクタイの新製品も開発されたが、これは従来にないシャリ感、光沢、シメの良さなどで好評を得つつあると思う。綺麗<sup>きれい</sup>という言葉の「綺麗」は、あや絹、もよう、美しい着物、表現としても絹のように美しいきれいな人、きれいな花・風景等も絹の

ような美しさ<sup>た</sup>と言って、絹の美しさを讃えている。真珠色が浮かび出たり消えたりする時の美しさを出す繊維は絹にしかないと思う。そこで何ゆえ絹にはこのような美しさがあるかと言うと、1万mもの長さで3gもない細い繊維であること、繊維の表面がニカワ質のセリシンという物質を中心にフィブロインと呼ばれる2本のタンパク質の繊維から出来ており、その一本のフィブロインは2,000本のフィブリル繊維の集まりで、さらに一本のフィブリルは極細のマイクロフィブリルの束から成っており、生糸は幾万本の極細糸の集合体から出来ているといわれている。絹の柔らかさ、たわみ、温かさ、滑らかさ、爽やかさ、優しさ等の着心地の不思議さは生糸の細さの構造によることが大きく、他の繊維には見られない素晴らしい特長をもつ繊維である。古代のシルクロード、中国大陸、国内の古墳からの絹衣の出土等から考えても、古代より現代まで人類の憧れと、そして親しまれた繊維であると思う。当社で年一回、松岡シルクフェアを数十年続けているが、例年3日間の開催期間中に2,500人以上の来客があり、年を経るごとに増加の方向にあることも絹製品を手取ることの楽しさ、嬉しさ<sup>うれ</sup>があるからと思い、今後も期待に応えるべく努力を積み重ねて行かねばならないと思っている。絹の衣類は他繊維に見られない素晴らしいしさがある。近年になって衣服の他用途として化粧品、工芸品、食品、美術工芸品、医療器材、整髪料に研究開発が進められ、絹フィブロイン入りの商品が市場に出てきており、当社でもシルクの水溶液の製造を数年前から進め、絹入り麺などに使用されている。今後のシルク部門は当社の力だけでは継続が出来ず行政と関係機関のご支援を得て、また養蚕農家がある限りそして松岡ブランドの需要がある限り歴史と伝統を守り続け、後世に残す社会的責任もあると考えている。

### 下妻 卓雄 (しもつま・たくお)

松岡株式会社 取締役会長。

1933年羽黒町松ヶ岡生まれ。現在松山町に在住。49年現松岡株式会社入社、専務取締役を経て、98年取締役社長、2004年より現職。知人との出会いから登山、写真、山野草(1,000鉢以上)、東洋蘭(100鉢くらい)、磯釣りが趣味。

松岡株式会社

〒999-6827 山形県飽海郡松山町字仲町20番地  
TEL 0234-62-2222・FAX 0234-62-3411